

# 茅風



Breeze from the field of thatch-grass

2005年12月20日

森林塾青水

事務局便り

茅風通信 16号



山口集落の紅葉 10月30日

清水英毅

## 今号の目次

9月～11月の活動報告 事務局 .....1

**特集：第5回フィールドスタディ兼講座「コモンズ村・ふじわら」**

講座「コモンズ村・ふじわら」第5回報告(海老沢).....2

10月フィールドスタディに参加して(土田).....3

道普請しながら考えたこと(高野).....3

森の宝物。新発見！ 源流の滝に感動 (林部).....4

須原尾根の迷い熊(滑志田).....4

ちょこっと労働していっぱい楽しむ!?(西脇).....6

草原でハンモック!!(高橋).....7

**特集：第6回フィールドスタディ兼講座「コモンズ村・ふじわら」**

第6回フィールドスタディ報告(池田).....7

里山は博物館だった(関岡).....7

私も上の原が大好きです(林久).....8

「すいとん」おいしかった(小野).....8

参加者アンケートのまとめ 事務局 .....9

**森の仲間の木工展**.....9

**第7回フィールドスタディ兼講座「コモンズ村・ふじわら」のご案内**.....10

**編集後記 塾長のつぶやき**.....12

## 9月～11月の活動報告

実りの秋のおいしいレポート満載！！

事務局

### 9月3日(土)～4日(日): 第4回フィールドスタディ兼講座「コモンズ村・ふじわら」

- ・来年の野焼き予定地の雑木伐採(3日)と雨呼山エクスカーション(4日)。参加22名、宿泊: 民宿「山椒」
- ・雨呼山には、藤原案内人クラブの高田保さんの名ガイドで楽しく登頂。十二神様に全員手を合わせて、山の恵みに感謝。



- ・3日夜は「地域資源活用策」をテーマに、地元の皆さんと検討会。地元から久さん、三郎さん、親男さん、万枝さん、裕さん(区長)、利根男さん(民宿組合長)、純ちゃんの諸氏参加。
- ・忘れられないのは、「山椒」さんでふるまっていた自家製野菜の数々とうどんの昔懐かしい味！高田さんご夫妻と第二子出産直後のお嬢さんが、頑張って再現していただいた昭和30年代の山里の食卓。素朴であったかい味でした。



### 9月21日(水): 国土緑化推進機構に田中専務理事、堀口部長を訪問

- ・同機構の「緑と水の森林基金」の助成を受けて1年がかりでまとめた「藤原地区地域資源活用調査」の結果報告 要約版・別添資料1 を塾長と浅川幹事が持参。
- ・「新しいコモンズ形成の取組み、素晴らしい。成果をいろんな場所で発表してください」とありがたい励ましのお言葉。

### 10月22日(土)～23日(日): 第5回フィールドスタディ兼講座「コモンズ村・ふじわら」

- ・フィールド内の道普請と「上の原の利用ルール」についての対地元打合せ・検討会 参加22名、宿泊 民宿「並木山荘」
- ・流石に熊うち名人のお宿。22日夜の熊鍋はぬくもりと滋味深い奥里山の味わいでした。
- ・22日から23日にかけて、谷川岳や武尊山に初冠雪。そんな気候条件下で屈強(?)の中年男性会員4人が、あわや遭難!という騒ぎもあって、大いなる学びの2日間でした。
- ・詳しくは特集の海老沢幹事レポート、臨場感あふれる滑志田顧問レポートならびに参加者各位のレポートをご参照ください。

### 11月3日(木)～4日(金): 『渋谷区民祭り』にみなかみ町と共同出展

- ・パネル展示や入会案内チラシの他に配布した絵葉書「ふじわら物語」が大好評！多葉田さんが撮りためた写真を、浅川さんが5枚1組で4種類の絵葉書に

仕立て、単価 300 円で試験販売したもの。いずれ、会員の皆さまにもお届けできるようにします。

- ・みなかみ町の野菜やりんごの販売もお手伝い。@130 円の葉付き大根は 1 時間で、@180 円のジャンボ白菜は 2 時間で完売でした。

11 月 12 日(土)～13 日(日): 第 6 回フィールドスタディ兼講座「コモンズ村・ふじわら」

- ・今年最後のフィールドワークとしての茅刈り(12 日)と「山の口終い」行事(13 日) 参加 18 名、宿泊 民宿「やすらぎ荘」
- ・今年の茅刈りは久さん、三郎さん、万枝さん、苞芳さんと町田工業・町田社長のご指導のもと、折からの「ふっこし」という悪天候にもめげず、皆で力を合わせた結果立派な出来映えの 30 ボッチが見事に立ち上がりました。
- ・恒例となった山の口終いは、今年も惣一郎さんの指揮のもと、全員で山の神=十二神様に手を合わせ一年の無事と森の恵みに感謝しました。
- ・又、これに先立ち、地元の NPO 法人自然遊学の児童とお母さん達 10 余名にも加わってもらい、フィールド周辺でゴミ拾い大会を今年も開催。参加した子ども達には、ロッジ「雪割草」の(中島)武さんご夫妻お手製のブナの実クッキーをプレゼント。6～7 年に一度と言われるブナの実大豊作の今年、森の恵みの甘味に子ども達も大喜びでした。
- ・詳しくは特集 の池田幹事レポートや参加者各位のレポートをご参照下さい。

11 月 16 日(水): 麗澤中学フィールドスタディの反省と来年度計画の打合せ

- ・学校から藤田先生、和田先生。日大生は鈴木リーダー以下 16 名。当塾から湯本リーダー以下 5 名が参加。これまでの反省を踏まえて、来年度の改善課題を検討。
- ・来年も共同して、他にないユニークなフィールドスタディを構築すべく、力を合わせることになりました。

11 月 21 日(月): 雲越家住宅資料館休憩所『遊山館』竣工・オープン記念祝典

- ・藤原地区田園空間整備事業の目玉、地元念願の施設オープン式典に招かれて、清水塾長、広川塾頭が参加。
- ・別添資料 2 の設立趣意書に見るごとく、地域丸ごと博物館の案内所と位置づけられており、当塾のめざす方向とも合致。ネーミングも当塾のモットー“楽しみながら良い汗をかく”にぴったりの『遊山館』に決定、誠に喜ばしいことでした。



以上

## 特集 : 第 5 回フィールドスタディ兼 講座「コモンズ村・ふじわら」

### 講座「コモンズ村・ふじわら」第 5 回報告 海老沢秀夫

とき: 2005 年 10 月 22 日(土)～23 日(日)

宿泊: 民宿「並木山荘」(群馬県みなかみ町藤原)

参加者: 22 人

(1) 去年整備した道を補修(22 日午後)

#### 作業

- ・十郎太沢沿いの道、ミズナラ林内の道、ススキ草原内の道を再整備した。
- ・作業内容は、トグワでの道ならし、刈り払い機と鎌によるササなどの刈り払いほか。セラピーロードらしきものが徐々に整備されつつある実感。



#### 反省など

- ・切れない刈り払い機の“刃”は効率と安全に影響する。今回は町に準備してもらったが、作業する私たちが自主的に責任をもって準備しないといけない。
  - ・来年は、別の場所に「新しい道」を。
- (2) 地元へ「上の原・ススキ草原利用のルール(案)」について説明(22 日夜)

#### 塾以外の出席者

< 町関係者 > 阿部一司・観光商工課長、木村伸介・主査、鈴木係長

< 地元関係者 > 林親男さん、林久さん、林三郎さん、雲越万枝さん、阿部惣一郎さん、吉野秀一さん

#### 地元への説明と意見交換

- ・上の原ススキ草原の森林化調査、侵入樹木伐採や野焼きなど、ススキ草原再生に向けたこれまでの仕事をプロジェクターを使って説明した
- ・将来の利用と管理をにらんで、「上の原・ススキ草原の利用と管理の変遷」を整理したペーパー別添資料 3 を作成して説明した
- 将来の可能性として、「上の原管理委員会の設置」「利用ルールの作成」「藤原地区休憩棟・遊山館を拠点として活用」など
- ・上の原の利用ルールをまとめた「森林塾青水“入会山”の約束事」(初版)を、地元関係者に初めて披露し、意見・感想をもらった。
- 地元の感想は、おおむね「OK」か。しかしペーパー 1 枚の一覧表では理解しにくかったかもしれない。絶大な賛意を得たわけではないので、「約束事」のさらなるブラッシュアップ、バージョンアップが必要だ。
- 積極的な意見として、「約束事」をわかりやすくまとめた“小冊子”、あるいは“パンフレット”を編集、公表していく方向性が出た。

## 総括 / ふたりのオブザーバーより

### < 三井昭二・三重大学教授 >

- ・市民が「入会」に関係していこうという動きが活発になっている。これはかつて、英国のコモンズで起こったこと。伝統的なコモンズ空間に市民が関わることで、開かれた「公園」になっていく。
- ・日本では、森林ボランティアや里山ボランティアの活動がさかんだが、かつては地域とかがかわろしな活動が多く、社会的には問題になっていた。都会の人がムラ社会から学ぶことは多いはず。その意味で、地域社会と積極的につながろうとしている森林塾青水の姿勢は大いに評価できる。
- ・ムラ社会に都市社会が入ってきたときに、「ムラ社会の有志」と「都会の有志」とがどう関わっていくのか、その関係の構築がポイントになるだろう。

### < 滑志田隆・森林塾青水顧問 >

- ・「自然公園」というジャンルの空間がある。国が指定して、いわば私たちに与えられた公園だ。
- ・一方で「市民本位の公園」というのが想定できる。市民の立場から利用と保全の方向を探ろうという動きは各地に礼がある。上の原の場合も、おもしろい実験だと思う。森林塾青水が、旧入会地の利用と管理に「責任」を持つようとしている。

以上

## 10月フィールドスタディに参加して

土田詠子

10月22日、23日のフィールドスタディ「森の道をつくる」に参加させていただきました。あいにくと雨模様の中、何本かの道毎にグループを作っての作業を行いました。道に茂ってしまった草木の中には刈り払うのがもったいないようなものもあり、実際に他のグループの方から「せっかく花を付けていたのに、もったいない！」とのご意見が出るほどのものもありましたが、整備の終わったあとの道はすっきりとして通りやすくなったように思います。

熊撃ち名人のご主人のお宿に泊めていただき、熊肉付きの美味しい夕食をいただいた後、町役場等地元の方々や青水の活動について話し合う勉強会の場がありました。これまでの青水の活動、今後目指していく方向等の説明の中で、青水は地元区民の皆さんと手を取り合っただけの活動を目指していく旨のお話がありました。勉強会のまとめとして、最後にお話いただいた先生のお話の中にも、青水が行っている活動は非常に珍しいものであり、その評価は地元にとりわけなじんではないかにかかっているのではないかとのご意見もありました。

青水の活動には何回か参加させていただいたのですが、地元との連携という視点は不勉強ながら持っていなかったため、良い学びになりました。

新たな取組の拡大や問題点の解決も多いと思いますが、平成18年が青水にとって良い年でありそうですように。

## 道普請しながら考えたこと

高野史郎

ススキ草原の上で、道普請をしながら考えた。

山道の階段で、やけに足長の人が設計したとしか思われなところがあって、リズムが狂うこともしばしばある。自分の場合、10メートルを18歩とすると、1歩が55センチか。子ども達が駆け足で登る時・駆け下りる時は？ 設計基準の、踏み板と蹴上げの寸法はどうだったっけ？

間もなく雪が降る。ここに何メートルもの雪が積もる。春になれば、降り積もった雪が固まってずり落ちる。もの凄い力！ 大雨が降れば、水はどこへ流れていく？ 水溜りが出来てもいけないし。

十郎太の泉からの坂道に、地面にぴったりと張り付いたメマツヨイグサのロゼットが目立った。草刈機には、今回使った丸い歯車タイプとナイロンロープのものがあつた。地面すれすれの所を草刈するには、2ミリ角のナイロンロープをぶん回すほうが効率がいい。あのロゼット、それを見越して低い姿勢をとったのか？ 間もなく雪、4月までの半年も光が届かない雪の下だ。光合成は無理だとすると、どんな冬の生活が成り立つのだろうか？

翌23日、心配した雨がやんだ。谷川や武尊は初冠雪！ カラマツ林を抜けて十二神様(ジウコマ)の方へ清水さんたちと散歩する。おいしそうなキノコはどこにある？ 10メートルほどの高さのコシアブラが、特有のうす緑に紅葉？していた。十二神様のところへ左折するあたりから、オオバコがやけに増えた。踏みつけに強い草として知られているが、これは靴底のギザギザにくっついて下界から運ばれたものだろう。

民話には、オオバコはカエルが変身したとか、その逆の話がよくあって、オオバコをゲエロッパなどと呼ぶ地域もある。中国名は車前草、タネは車前子(シヤゼン)。古くから咳止め、腫れ物になするなどと利用されている。

今回は温度計を2本持参して、時々気温と水温を計った。22日の11時半、気温13。遭難事件があった？ 午後4時で9.0。23日の早朝6時が6.0、この時の室温が12.5、水道水が8.0。11時の十郎太の水が9.5。さて、ここからどんなことが予測されるのでしょうか？

もっとも、並木山荘の玄関前の温度計との誤差もあったので、帰宅してから5本の温度計を並べて修正しました。かなり精密な温度計でも10本並べると、0.5ぐらいの誤差はあるものなのですが、これ、どうするかいつも悩みのタネです。



コシアブラ



メマツヨイグサのロゼット



翌日、持ち帰った植物の種名の確認、測定・スケッチ。気にしながらドクウツギの葉っぱを描いていたら、急にめまいと吐き気のでき状態に！ ものの本には、全草にコリアミルチンなどを含み、誤食すれば血圧が高まり、嘔吐、よだれが出て全身硬直、呼吸麻痺がおこる・・・などと恐ろしいことが。たぶん、気のせいだったのでしょね。

私にとっても、参加された人それぞれにとっても、楽しく有意義なプログラムでした。スタッフの方がた、いつもいつもご苦労様です。



ドクウツギ

### 森の宝物、新発見！

源流の滝に感動

林部良治

10月22日の午後12時曇り空のなか、広川さんに声をかけられ森の観察・宝物発見のため出発。武尊山道から森に入る散策路を作るため、茅刈りの作業から始める。先頭は非常に負担がかかるため、広川さんと松土さんが交代しながら担当し、小生はとてもじゃないが体力に自信が無いのと、方向音痴なため先頭に立つ勇気がなく、2番手をキープしながら先頭の人を刈残しと道幅を少し広げるための作業を担当。途中から滑志田さんが合流。行く手にはタニウツギの大株があり、それを避けながらおよそ150mの距離を約30分で終了。

いよいよ森に入る。入り口は笹や藪もなく結構スッキリしており、さほど手を加える事もなく登って行くと、素晴らしいミズナラの森に出会う。広川さんの「若しかしたら天然舞茸が有るかもかもしれないよ」との一言で俄然元気付く。目はギンギンギラギラ、足はウサギのように軽くピョンピョンと辺りのミズナラの根元を探すも終に見つからず。「広川さん全然無いよ」と言う。「そんな簡単に有るわけ無いよ。もし見つかったら思わず舞うほど喜ぶんだから」。なるほどそれで舞茸か。名前の由来は納得するも疲れが一気に出てしまう。(この名前の由来は冗談でなく正しいですよ。広辞苑によると、もう一説は全体の姿が舞っているように見えるからとあります)。それでも気を取り直し

て、来年以降必ず舞茸が出るよう山の神様に願掛けしてきましたので、今後この場所で舞茸を見つけたら、小生に感謝するだけでなくお裾分けをお願いします。

下ばかり見ていたが、頭上をよく観るとミズナラは等間隔に林立し、しかも3~5本の株立ちになっており、伐採された後に萌芽更新されたものと思われる。1本の直径は10~15cm位あり広川さんの見解では樹齢60年位ではないかとの事。これらの事から、昔はここは炭焼きの材を入手するための森であり、大事に手入れされていたのではないかと思われる。

ミズナラ林を過ぎ、暫く登ると今度はブナの樹に出会う。点在ではあるが結構幹は太く直径30cm位の大木もあった。今年はブナの実が7年振りの豊作との事で沢山の実が落ちており、幹には熊の爪跡がいくつもついていて。この辺りまでは体力に自信が無い人でも十分に行けます。

その先を進むと、広川さんが「水の流れる音がする」と言うが辺りを見回しても水は見えません。音がする方に更に近づくとそこは伏流水になっており、その上方を見ると高さ2m強の大きな石の上から五条ほどの水が滝状に滴り落ちており、正しく源流発見・宝物発見！。ここに行くには多少の道普請が必要。

此処で帰れば、数々の新発見があり「いい日旅立ち」「良い一日」で終わり、皆様にご迷惑とご心配を掛けずに済んだのですが、もっと上を目指したばかりにとんでもない彷徨体験をしてしまう。宿舎に帰ってキツニー一発。「遭難しそこなったんだって?」「ソーナンダ」最後に冗談が言えるくらいで、無事に帰れて良かったです。



### 須原尾根の迷い熊

滑志田隆

身の丈より高いチシマザサをかき分け、紅葉した灌木の藪をくぐる。けもの道すら無い急斜面である。転げ落ちるように歩き続けるほかに選択肢はなかった。日没が近付いており、無謀にもヘッドランプを持たずに入山した私たちは焦っていた。

「須原尾根」は利根源流の高々1272メートルの低山である。平坦な山頂には三角点もあるらしい。仰ぎ見て親しむだけではなく、頂上から茅原を眺め渡してみたい。そんな抱負を胸にゲート広場を出発したのである。先頭に行くHさんは柄の長い両刃の鉈と白いビニール紐の束、続く3人はそれぞれに鎌を持っていた。

出発してから30分余りまで、私たちは茅を刈り払い、森林塾の仲間たちのために道をつくりながら進んだ。カラマツ林との境界に注目しながら登り、ミズナラなどの樹木にビニール紐を巻きながら頂上を目指す。ナナカマドの葉が赤く染まり、清楚なコマユミの実が揺れている。秋山のよそおいの美しさは格別だ。

標高 1200 メートル付近のミズナラの根元で休憩し、鎌と雨具の一部を置いて行く。「ここに戻ってくる」ための目印にしたつもりだったのだ。先頭を歩くHさんがふたつの耳に手を当てながら「せせらぎの音が聞こえるよ」と言っでは微笑する。



少し下った地点の岩場から4本に分かれた清水がしたたっていた。「皆に報告し、うらやましがらせたい」「写真を撮るのでポーズを決めよう」「すぐに碑を建てたがる人もいるから注意しろ」。そんな冗談を言い合いながら休憩する。そろって喫煙を好む中年男4人組は、この時点まで非常に元気が良かった。

端正な水場を右に見ながら岩場を巻いたところから、すぐに急登が始まった。地形が急なので薪炭用の伐採を免れたのだろうか、樹齢百年を超えるようなブナの木も生えている。幹にはツキノワグマの爪跡が無数に刻まれており、森の中で胎動する野生の命のたくましさを感じさせていた。

「匂うな」とHさんが言う。「たしかに、これは熊だな」とMさんが同調する。日ごろから木材の香りに親しんだ木工家らの嗅覚は秀でている。けもの道の地面に、爪先まで掘りこまれた新しい足跡が残っていた。

山の遠景のなだらかな姿から予想できない厳しい登りだった。樹林内に隠れた岩場の起伏が、山全体の地形を複雑にし、人の直登をはばんでいた。ようやく右肩上がりの尾根に出たのは午後2時30分であり、私たちは平坦な場所を見つけて遅い昼食を取った。その後すぐに歩き始めたが、一向に頂上のポイントが見つからない。樹林から頭を出しているブナの大木に鉋目を入れ、下り始めたのは午後3時15分。その10分後には、登りの時に枝に巻きつけたビニールテープを見失い、私たちはチシマザサの藪の中をさまよい始めていたのだ。

一度は沢に下ったのだが、方位が判然としない。慣れ親しんだ十郎太沢とどのような関係なのか。Hさんの見立てでは「山の反対側、湯の小屋方面へと流れる沢ではないか」という。協議のすえ、その沢をさかのぼって尾根に出る決断をする。しかし、誤ったと考えては途中から逆方向に進路を取る始末だ。沢を下ってみる勇氣はなく、明るい空に向かって山腹を進み、左側へと尾根を越えようとする。ところが目の前は絶壁となり、仕方なくさらに左に巻き、岩壁が終わったあたりで右前方に進む。

迷った時間はわずか1時間余りだが、迫ってくる夕闇が私たちをいかに恐怖させた。やがて樹間に屋根が見え、道路脇の電灯も確認できた。それでも斜面の足場は悪く、灌木につかまりながら滑り落ちるかのようだった。

平坦なススキ野原に入っても、どのあたりに下りてきたのか分からなかった。上の原の駐車場にたどりつた時は午後5時10分。周囲が暗くなるまでに30分間ほどしか残っていなかった。

まさに晩秋の陽はつるべ落とし。一時は方向を見失い、ピバークもやむなしと思ったほどのピンチだった。南の空の一角が明るかったことが目印となり、なつかしい茅原への道を探り出すことができた。

民宿「並木山荘」では夕食の支度が整おうとしていた。藪の中を徘徊中に携帯電話で方位を知らせてくれた森林塾の仲間に深謝しながら、靴紐をほどいた。待っていた人々の顔がすべて仏様のように見えた。翌朝は谷川岳の初冠雪だったから、山中で一夜を過ごしていたら大きな騒ぎを招いたことだろう。藤原の里の藪山、まことに恐るべし。たとえば、目隠しをされたまま自分の家の中をさまようごとし。ひと度方位を失えば、慣れ親しんだ里山も危険の連続となる。道のない山のおそろしさが、身にしみて分かった思いだった。

地図で確認すれば、標高差はわずかに270メートルしかない。ルート未知の藪山をあなどった中年登山…。晩秋の日没の恐怖が私の脳裏に刻まれた。須原尾根への悔恨が、民宿の湯船の中であらためてこみ上げて来るのだった。



夕食後のミーティングでも気持ちが落ち着かない。ビール、日本酒、焼酎のお湯割りと、立て続けに酒をあおっても少しも眠くならなかった。民宿のご主人・吉野秀市さん(大正14年生まれ)に誘われるままに掘り炬燵に入って足を伸ばし、焼酎のお湯割を飲みながら午前1時過ぎまで熊狩り談義を聞き込むほかなかった。

吉野さんによれば、須原尾根に登るには雪で覆われている時期のほか、つまり藪こぎの季節は狩人でも回避するという。あえて困難な時期を選んだ私たちの冒険も、森林塾の活動にとって無駄にはならなかったはずである。個人的には、ツキノワグマの爪あとと足跡が随分と身近なものになったことが収穫だった。

60年以上の射撃歴、仕留めた熊は約300頭。新聞社の名が入った私の名刺を見ながら、吉野さんは自らを「水上一の狩人」と記録してほしいものだと言った。

翁は最近まで村田銃を愛用していたという。熊の習性や射撃のコツについては具体的であり、野生動物と人間との関係を考えるうえで示唆に富んでいた。特に興味深かったのは、昭和40年代中頃まで生きていた熊狩りの経済システムとも言えるべき仕組みである。生きた熊を捕獲する者たちの掟、死んだ熊の体を買いに来る者たちの結(ゆい)、解体して卸売りする者たちの運営ルールが明確にあったらしい。

現在では捕殺した熊の経済的価値は、高い薬効が知



られる胆のうの大きさによって左右される。そのみが売られ、残りの部位は自家用または観光客向けだ。捕殺した熊を自分で解体し、熊胆(くまのい)を取り出し、乾燥させて保存する。

熊の体が大きいからといって胆のうが大きいわけではなく、何を食べていたのか、あるいはその熊の持つ遺伝子によって決まる。一個の熊の胆が高いときには30万円で売られるが、小さいものは5万円程度のこともある。しかし、肉と毛皮と熊胆は体全体の値段を決めるうえで「3等分」に評価するのが、本来の伝統だったという。

水上地方で捕獲されるツキノワグマは17貫(64キログラム)以上は「大物」と呼ばれた。熊の死体を扱う仲買商人は新潟方面から藤原地区に入ってきて、吉野さんら狩人は1貫につき1万3千円で一頭の値を決められ、現金で手渡されたという。

捕獲される平均的な大きさである15貫のツキノワグマを例にして考えると、その値段は最盛期の卸価格で19万5千円。そのうち熊胆の評価額が6万5千円を占める。現代の貨幣価値に換算すれば、熊一頭の値は100万円弱に相当するだろうか。だから、青・壮年時代の吉野さんにとって熊狩は危険をとまなうアルバイトではあったが、一冬(合法的な狩猟期間は2月15日まで)に5頭も捕獲することができれば「笑いがとまん」ビジネスだったという。

仲買商人らは熊の死体を「マル」の状態取引することを好んだため、藤原地区では商業用に解体することはなかったらしい。仲買商人らは5人組あるいは10人組で解体に立会うという。その際の熊胆の取り扱いには慎重であり、胆のうの重量を言い当てた者(申告した予想重量が実際値に最も近かった者)が競売を仕切る権利を与えられ、仮に相場で見込まれたよりも高い値段で取引された時には、利益の一部をグループ内で分配する慣わしだったという。

「テンの毛皮の値段が土木作業一日分の労賃の7倍も高かったのは、結婚する前の年だった。」「一番熊を獲ったのは、結婚してから5年目ぐらいだったかな。吉野さんはいつも、結婚の時点を自分史の回顧の中心に置きながら事実を思い出す。昭和8年生まれで新潟県出身の奥さんとの見合い結婚も、熊を求めて水上地方を回っていた仲買商人が最初の情報をもらしたらしい。

その商人は藤原では吉野さんの家と特に親しい関係であり、新潟県で熊胆や毛皮を売りさばく時には六日町の奥さんの家に泊まっていた。山深い里の華燭のともしびをツキノワグマが灯してくれたとも言えようか。

秋の夜長。狩人の自慢話も終幕に近付いた。須原尾根で見た爪痕、民宿で聞いた熊撃ちの経済。藤原の里に生きるツキノワグマたちが、ぐっと身近な存在に思えてきた。

私がお礼を言うと、吉野さんは「いくら講釈しても、実物を見ないと分かるまい」と言いながら、小机の引き出しから「自家用」と買った小箱を取り出した。中

身の熊胆は薄緑色の粒であり、ガラスくずのように光沢を放っていた。私が大きめのものを選んで指でつまもうとすると、「待て。そりゃあ、無謀な取り方だ」と叫び声を上げた。(了)



### ちょこっと労働していっぱい楽しむ!?

西脇伊津美

何だか良く判らないけど面白そうなことをやっているみたい知人に川端さんを紹介され「森林塾青水」の話聞いた時の感想です。それが今回の参加で、凄い事を、真面目に、それも楽しんでやってるんだあ～と感じました。

今までは登山の時に誰が道作りをして、誰が整備してるのかなんて考えもしませんでした。山には登山道があるのは当たり前だと思って歩いていました(反省!)

現在は腰を痛めて登るのは諦めています「山や自然とこんな付き合いもあつたんだ」と目から鱗状態です。

これから私も山や自然に感謝しながら、今まで癒されて来た分お返しをしなければと思いましたが、本音は好奇心と遊び心がいっぱい、これからの行事の参加を楽しみにしています。それと塾長はじめスペシャリストの方々にいろいろと教えていただけるのもすごく楽しみです。

今回は、まゆみ、こまゆみの可愛い花や、ほうの木、とちの木の葉っぱの違いを教わりました。十二様もお参りしました。今まで里山はいつも急ぎ足で通り過ぎてた感じがします。

天候までが優しく味方してくれて雨にも降られず、谷川岳や朝日岳の初冠雪も見られてとてもラッキーでした。

初体験の熊鍋の美味しかったこと、5年前谷川岳に登った時チラッと熊を見て怖いと思ったけど、今度会ったら「美味しそう!」と思ったらもっと怖い気がします。

この2日間でこれからの自然との接しかたが解った様な気がします。

「ちょこっと労働?していっぱい楽しむ」をモットーに頑張りたいと思いますのでどうぞ宜しくお願いします。

以上

## 草原でハンモック!!

高橋志津

はるか彼方にまで広がる牧場。羊は草を食い終えてゆったりとしている。一仕事終えた牧童は傍らに、ハンモックに丁度よい木を見つけ、しばし疲れを癒す。彼方の山頂に雪を見、此方の丘の紅葉に目を奪われ、冬が近づいてきたことを感じつつ、私は暖かい陽の中でまどろむ。

ニュージーランドやトルファン、ローランの風景と重なって・・・。

雑木伐採の仕事が終わって一休みした、そんな時のことでした。

事務局注;高橋さんから頂いたお便りを編集させていただきました。



## 特集 : 第6回フィールドスタディ兼 講座「モズ村・ふじわら」

### 第6回フィールドスタディ報告

池田登

冬の間近な藤原で

11月12日早朝、上毛高原駅から見える近くの山々には、重たい冬の低い雲が垂れ込め、時折みぞれが風に乗り、横なぐりに舞っていました。フィールドに立った時点でも、あやうい空模様で今日の茅刈りは・・・と、皆心配顔でした。

時折、雲の間から谷川岳の白い姿、藤原ではもう冬の入口なのだという実感、何はさておき年の締めくくり、茅刈りとフィールド整備作業の開始である。地元の方強い参加者、林久、三郎、親男さん、さらに万枝さん、苞芳さん、惣一郎さんらが参加して下さり、マンツーマンに近い「手とり足とり茅刈りツアー」となった。

昨年、野焼きを行った区域の茅の成長は、目を見張るものがあり、やはり前人の語り継がれた話は本当である。来年、野焼き予定の場所からは、甲高い音が力強く木霊している。今回も役場の好意を受けてのチェーンソーの響きである。時間の経過とともに「ポッチ」の背高さの数が増していく。扇型にそれぞれ広がった人たちの姿が茅原に列をなし、楽しい語らいの中での作業模様となっている。

実質3回目を迎えた茅刈りも年々、その姿を変えている。ぎこちなかったポッチ作りもしっかり天に向かって立ち、鎌研ぎも各自が行うようになった。道具も充実しつつあり、何よりも、楽しみ、語らいながらの作業が出来るようになったと感じている。



道作り(セラピーロード)班も、新たなルート発見をと、惣一郎さんを出発、その成果「木馬道」の発見はすばらしいものとなり、来年からの新たな楽しみなセラピーロード作りとなるでしょう。

2日間にわたるフィールドスタディ。二日目は晴天に恵まれ、その作業をさらに楽しいものとしてくれました。来年の野焼きの場所のフィールド整備は多少残ったとの反省もありましたが、無事「山の口終い」も終え、年々少しずつ質的に向上した今回のフィールドワークとなりました。

我が森林塾のシンボルの一つであるフィールドの門柱、これに寄り添い一本の4メートルくらいのポールが立っています。野焼きの前に行く、除雪作業の目印です。3メートル近い積雪となっても、その位置がわかるようにとの配慮です。地元の方(万枝さん?)の心遣いに「ただ感動」又、フィールドのゴミ拾いにも藤原、みなかみ町の方々、お子さんら多くの参加には、いつもの事ながら感謝しております。ありがとうございます。今後共、一緒にフィールドで楽しみたいと考えております。



さらに、町田工業の方々や森林塾、地元の茅刈り隊とフィールドを通じ、よりよい関係が続け、よりよい茅場とその利用に関して、さらに連帯を深めていきたいと考えております。

## 里山は博物館だった

関岡千賀

平日頃は、会社のパソコンの前にかじりついている、虚弱な女子社員の私ですが、今回、縁あって塾長にお会いする機会を持ち、森林塾のフィールドスタディに初めて参加させていただきました。今年最後のフィールドスタディとなる11月12、13日の予定表を受け取った後、塾長から頂いた一言は「セーターと雨具を持って来なさい」。その塾長の言葉を軽く受け止め、上毛高原の略式の地図を少しばかり眺めただけで、今回の「茅刈り」に参加した自分がいかに無謀だったかと、やや悔やまれる初参加となりました。11月12日の「上毛高原」駅前には、山のエキスパートと思しき先輩方が十数名。私と言えば登った山はせいぜい高尾山か、白馬のスキー場程度の経験しかありません。「山の寒さ」などろくに考えていなかったため、初日のみぞれは堪えました。セーター一枚にフリースと雨合羽姿の私は、ここ最近では真冬でさえ覚えたことのない、震え上がるような「寒さ」を体感させていただきました。大変貴重な経験でした。



とはいえ、はなから好奇心だけで臨んだフィールドスタディです。格好など二の次です。初めて持つ鎌、鮮やかな紅葉、背の高い茅の音やしなり、古老、先輩方の軽快な身のこなし、それぞれの新鮮さに気をうばわれ、夕方には一心に茅を抱え、鎌を握る自分がありました（あまり人の役には立たなかった）。

私が知っている「ススキ」は庭園の「ススキ」だということを教えて下さったのは、山の古老の方です。ススキは守らないと小さな株に戻ってしまう。

「箱根の仙石原の茅原だってススキなんですよ。あれなら見たことがあるでしょう。仙石原の茅原もこの茅原も同じで、雑木を倒したりして守らないと横には広がらなくて、段々庭のススキみたいな小さい株になってしまうんですよ。」

刈り取ったあとの茅の切り口には、真っ赤な草の汁がすぐふきだし、また根元にはすでに、新しい柔らかな緑の芽が伸びている。そんな光景に目を見張りながら、普段どれほど土から離れて生活しているかを考えました。小さな庭仕事さえ手伝っていなかったのですから。

里山フィールドはまさに「博物館」だと感銘を受けました。里山そのものが館内ですから、古老の方々、先輩方は皆が学芸員で、きっと歩くこと自体が学びで、その情報は底なしの無限なのでしょう。そう思うと気が遠くなるような気がします。自分の力量は情けないほどですが、継続は力なりといえます。また教を請いに、里山フィールドスタディに参加させていただければと思います。



追記：「山の口<sup>しま</sup>終い」を、同僚に説明するのに苦労しました。最後には「海開き」の逆だという話になってしまったので、ぜひ次号の「茅風通信」を持って、もう一度説明にあたってみようと考えています。

### 私も上の原が大好きです 林久(茅刈りグループ代表)

塾長様はじめ皆様、楽しい一日をありがとうございました。11月12日、気象庁では雨との予報でお天気が心配でした。寒かったです。茅刈り作業が何とかできまして本当に良かったと思います。

東京からの塾の皆様が一生懸命に慣れない茅刈りに挑戦する姿には感心いたしました。上の原にこのような活動の展開方針を立てられたことに心より感動しております。

森の良さ、水の良さ、景色の良さ、茅の重要性を世の中に知らしめて下さる森林塾。コモンズ村ふじわらの入会慣行を考え、いろいろのイベントを策定くださり、地元としても大変誇りに思います。

地域として歓迎すると共に、なお一層協力すべきで

あると考えます。私も上の原が大好きです。今後、歳を取っても働ける内は参加するようにつとめます。

本当にありがとうございました。今後ともよろしく願っています。



### 「すいとん」おいしかった

小野 丞

昨年1年間お世話になった「コモンズ村ふじわら」に久しぶりに参加しましたが、とても楽しい時間を過ごすことができました。一緒に参加させていただいた知人もとても楽しく過ごせたそうです。

フィールドの雰囲気は昨年と大幅には変化していませんでしたが、広川さん作の「看板」(表示が一部間違っているらしいですが・・・)が新たに設置され、今回は時間がなく散策できませんでしたが、歩道整備も進んだと聞きました。来年は散策したいと思います。昨年制作した水飲み場は積み上げられた石や芝生も落ち着き良い雰囲気になっていました。(できれば水の出口の塩ビ管に細工したいですね。)

昨年行った茅束の塔はさすが今年のほうが全体的にクオリティが高くなっていました。今回はフィールド整備をお手伝いしましたが、よく確認すると茅以外にかなりの木が生えているのに気がつきました。雑木は切ってしまうと構わないと思いますが、茅場に立つ白樺などの木々も絵になりますよね・・・。今後は残す木と茅場整備のために切ってしまう木を選別しておいても良いのでは・・・と思いました。しかし、大木を簡単に倒してしまう技術には感心するばかりでした。

幸新さんのコモンズオリジナルメニューの「すいとん」美味しかったです。毎回皆さんと食事すると地元の人が忘れていた地元の料理が食べられ嬉しいのですが、考えさせられるところもあります。田楽の味噌も格別でした。これだけ地元オリジナルで美味しい料理を提供できることを、地元の者自身がうまく利用できるようなならないといけませんよね・・・。

地元の人たちと合同のゴミ拾い、ゴミが昨年に比べ減っているのが嬉しかったです。綺麗な場所にはゴミは捨てにくいですが。食事を一緒にしないで午後から合流となる場合、地元の人たちとの交流できるイベントをもう少し検討しても良いのでは・・・と今回思いました。

今年は合併などがあり1回の参加しかできませんでしたが、来年は仕事ではなく個人参加させて頂きたいと思っています。

以上



## 参加者アンケートのまとめ

(事務局)

### 今回のふり返り、来年やりたいこと、などー

#### 茅刈りについて

- ・町田工業の町田社長さんが現地参加、宿泊参加でメリハリができました。地元の有志が思いもかけずたくさん参加してくれて嬉しかった。2日目も来てくれましたし。二重丸です。
- ・昼休みなどの時間に、キノコ鍋など囲みながら地元、町田工業の人達と交流できると良いな～。
- ・鎌研ぎが出来てよかった。今後も継続、定着させたい。

#### 「山の口終い」行事について

- ・ゴミ拾い大会、町の子どもやお母さん達と一緒に出来てよかった。地元の婦人会や藤原小・中学校の生徒達とも茅刈りを含めて一緒に出来るとなおい。
- ・惣一郎さんはじめ、地元の方々のお話を聞いていると本当に心が安らぐ思いです。どうして、あのような柔和な笑顔や態度が生まれるのか考えると、藤原での仕事や暮らしが土台になっているのかな、と。
- ・即席キノコ汁はおいしかった。近くで採取した山菜の料理体験もいかがでしょうか。

#### ミズナラ林の散策と道づくり、など

- ・ミズナラ林 八八ソの泉 炭窯跡 元・木馬道(きんまみち)のコースは1時間30分で遊歩道として最適。青水の森の定番としたい。惣一郎さん、ありがとう！
- ・今回は水源の「滝」に行けなくて、それだけが残念でした。来年は是非とも行ってみたいものです。

#### 2日間の感想、来年やりたいこと、など

- ・全体として楽しい2日間でした。 commonsの色合いをもっと濃く前面に出しても良い？ 来年もcommonsとして続けてもらいたい。
- ・来年は、木馬道(きんまみち)を中心に第二のセラピーロード作りを実現させたい。
- ・6月に歩いた古道(寺山峠、青木沢峠)の道づくり。9月に民宿のオーナー(高田保さん)と回った雨坪山から村の水源沿いに歩いた道の普請。
- ・茅葺き屋根の下で、中之祭のお茶も飲みたい(町田社長さん、よろしく!)。みそ作りもやりたい。
- ・夜の星空ウォッチング、是非やりたい。
- ・来年は事務所の有効利用、「遊山館」の活用を考えたいものです。 以上

## 森の仲間の木工展

12月2日～4日群馬県赤城村赤城工房にて、塾の仲間の木工家達の展示会が行われました。場所は元小学校の校舎を木工家達が創作の場として借りている所です。掲示物や教室名などがそのまま残っている大変面白い所でした。松土さんはここに工房があります。

大きいものはテーブルやイス、ブローチなどの小物もありました。作品はもちろん販売も行っているのですが、塾のホームページでそのうち紹介したいと思います。初日は群馬テレビが取材に来ていました。塾の紹介パネルも展示し、リーフレットも置いてもらいました。



天板アガニ 脚イタガキ Enfield Settees

## 「森の仲間」木工展



太田 浩之 BCわーくしょっぷ  
〒378-0102 川場村別所2463 TEL・FAX 0278-52-3416  
野村 コージ 野村デザイン室  
〒370-1406 鬼石町浄法寺1096-2 TEL・FAX 0274-52-5369  
野村 康之 野村デザイン室  
〒370-1406 鬼石町浄法寺1096-2 TEL・FAX 0274-52-5369  
広川 義直 水工房  
〒379-1617 みなかみ町湯原701 TEL・FAX 0278-72-6250  
松土 忠 赤城工房  
〒379-1101 赤城村棚下74-1 TEL・FAX 0279-56-3062

## 次回 = 06年2月 第7回フィールドステイ兼講座「コヅ村・ふじわら」のご案内

今年度の最終回です。藤原の茅葺き職人で、さまざまな生活用具作りにも通じている阿部惣一郎さんの指導で、藤原型かんじきを作ります。2日目は、自作のかんじきで上の原のフィールドで雪原散策を楽しみます。また、地元の除雪作業(雪堀り)の手伝いを予定しています。

ところ：群馬県みなかみ町藤原字山口

集 合：上越新幹線「上毛高原駅」に初日午前10時15分

(電車) Maxとき311号・東京駅8時32分 上毛高原駅10時13分

宿 泊：民宿「樹林」(みなかみ町藤原字山口) 0278-75-2040

参加費：会員 10,500円 コヅ 受講者 12,000円

(1泊3食の宿泊費、かんじき材料費と指導料、「遊山館」利用料、保険代など)

初日の昼食は各自、弁当など持参して下さい。集合駅までの交通費は各自負担です。

### 【1日目】2月18日(土)

時刻	内 容	場 所	指 導
10:15	上毛高原駅集合		
11:30	【かんじき作り実習】 ・ かんじき作り作業の準備など	遊山館	阿部惣一郎
12:00	昼食(各自持参)	遊山館	
13:00	【かんじき作り実習】 ・ 枠と爪を固定し、ヒモを巻く	遊山館	阿部惣一郎
18:00	夕食	民宿	
19:30	【懇談】かんじきの話、春の野焼きの話など	遊山館	阿部惣一郎、雲越万枝

### 【2日目】2月19日(日)

時刻	内 容	場 所	指 導
7:00	朝食	民宿	
8:30	【かんじきハイキング】 ・ 自作かんじきで雪の上の原へ	上の原	阿部惣一郎
11:00	【除雪の手伝い】 ・ 新しくできた「遊山館」の除雪 ・ 大ゆきだるま「ふっちゃん」のメンテナンス	山口地区	高田保
13:00	昼食(民宿が準備)	遊山館	
14:00	終了式、アンケート、解散	遊山館	
15:19	たにがわ416号(上毛高原駅)		

主 催：森林塾青水、水上町(共催) 共同企画：森林文化協会

問合せ・申込み：「森林塾青水」事務局代理 コミュニティ・デザイン内(浅川潔)

電話 03-3408-8670 ファクス 03-5474-0847

E-mail: [sinrinjyuku@fiberbit.net](mailto:sinrinjyuku@fiberbit.net)

**申し込み締め切りは2月3日迄**



**送信先**E-MAIL [sinrinjyuku@fiberbit.net](mailto:sinrinjyuku@fiberbit.net)

FAX 03 - 5474 - 0847

森林塾青水 事務局代理 (コミュニティデザイン内)

## 出欠連絡票

<b>お名前</b>				
E-MAIL 又は連絡先				
2月フィールドステイに (どちらかに丸してください)		参加します		欠席します
2月	18日(土)日帰り	18日(土)宿泊	18日(土)夕食	19日(日)昼食
	交通	車	電車	
希望の箇所に 印を付けて下さい。				
<b>通信欄</b>				
ご欠席の方特にご記入願います				

この秋、嬉しいことが沢山あった。思い出すままに記してみる。

- ・ 9月初旬、民宿「山椒」で地元の皆さんと地域活性化策の打合せをしていた夜のこと。(雲越)万枝さんから、「見てもらえれば、その違いは明らかです。去年野焼きした場所の茅は立派に育っています。来年も、ちゃんとやりましょう」とのご発言。誠に、心強いご発言であった。
- ・ 9月下旬、国土緑化推進機構を訪ねて『藤原地域資源活用調査』事業の結果報告をした折のこと。田中専務理事より、「新しいコモンズ作りの取り組みすばらしいことだ。もっと、いろんな場所でどんどん発表、啓蒙してください」とのお言葉。何よりの励ましとなった。
- ・ 11月21日大安吉日、地元念願の『遊山館』が竣工、オープンした。その設立趣意書の冒頭で、本館の利用目的について「地域まるごと博物館の総合案内所として・・・」とあった。当塾が目指す理想の姿=エコミュージアムのコアセンターを先取りしたかたちであり、これまた嬉しい限りのことであった。

他にも思いもかけなかった発見、感動が数々あった。

- ・ 当塾最強のクライマー4人による水源の滝の発見！(遭遇?)炭焼窯跡と木馬道(きんまみち)跡の発見。惣一郎さんのお陰です。
- ・ 茅刈り作業が地元の皆さん、町田工業の皆さん、我々とのコラボレーションで出来たこと。リーダーの久さん、町田社長に大感謝。
- ・ 笹岡、安楽、滑志田の三顧問と三井先生までが、ご多用の中をやりくりされてフィールドワークにご出馬、適切なご助言・ご示唆をいただいた。望外の喜びだった。

滑志田顧問が『林野時報』11月号誌上で当塾の活動振りを「コモンズの復権 群馬県みなかみ町、森林塾青水の試み」と題して、紹介して下さった。

- ・ 文中に曰く、「森林塾青水の活動の歩みをたどると、いわゆる森林ボランティアたちが単に森を好む趣味の人々から、社会活動の担い手へと目覚めていく過程がよく理解できる」 また、「ボランティアたちの仕事は森林整備から、心の風景の復元へと発展しようとしている。過疎化しつつある集落から、地域まるごと博物館としてよみがえる日は近い」と結んでおられる。
- ・ 我々自身が意識もしくは自覚するしないに拘わらず、林政・環境ジャーナリストとしてのご評価。身のひきしめる思いを新たにするとともに、顧問からのお便りにもあったごとく、「楽しくやるのが何よりです」と自らに言いきかせたことであった。

浅川さん、いつもながら仕事の合間をぬってのやりくり算段、無給でスミマセン！

そして、川端さん。公私ともご繁多の中、編集作業の強力助っ人役ありがとうございました。原稿や写真をお寄せいただいた大勢の皆さん、ありがとうございました。今号が良いXmasプレゼントになりますように。そして、皆さん良いお年をお迎えくださいますように。

吾思ふ 故に吾あり 冬木立

(青)